

田口卯吉 (たぐち・うきち) 1855~1905

経済学者・歴史家・政治家 ~明治国家の生成と共に歩んだ百科全書派的人物~

出生 安政2年4月29日(1855)江戸目白台(現・東京都文京区)の徒士屋敷で生まれる。卯年・卯月の生まれのため、卯吉を通称とする。慶応2年4月15日(1866)の元服にあたり、曾祖父佐藤一斎の嗣子立軒より名を鉉、字を子玉、号を鼎軒と授かった。幼少期に父と兄を亡くし、生活は苦しかった。



履歴 大蔵省翻訳局上級生徒となり(1872)、経済学を学んだ。大蔵省退職(1878)まで、翻訳従事のかたわら新聞へ投稿、自由貿易論や歴史の研究も続けた。渋沢栄一らの援助を得て経済雑誌社を設立し、『東京経済雑誌』を創刊(1879)経済評論の第一人者の地位を確立した。『大日本人辞書』(1886)、『日本社会事彙』(1890~91)の刊行、『群書類従』の活版刊行(1893~94)、『国史大系』の編纂刊行(1897~1901)雑誌『史海』の創刊発行(1891~96)など日本史研究の水準向上に寄与する事業も行った。活動の幅は多岐にわたっており、実業家としては東京株式取引所肝煎(1883~86)両毛鉄道社長(1886~90)南島商會事業(1890~91)等で活躍。東京府会議員(1880~90, 1891~92)東京市会議員(1889~90)衆議院議員(1894~死去まで)の政治活動も行った。博士会の推薦により、民間初の法学博士の学位を授与された(1899)。

事績 維新前後の経済的困窮状態の中で、所属する組織の崩壊に幾度となく直面し、その度に人生航路の変更を余儀なくされた。その経験や生来の江戸っ子気質から、独立自営の精神を培い終生貫いた。イギリス古典派を根拠とする経済学を思想的基盤とし、自由貿易主義を掲げて『東京経済雑誌』を創刊、同誌を拠点として独自の経済論および文明史論を展開した。東京府会、東京市会の議員として地方財政・税制の合理化、市政の肅正を唱え、代議士としては都市商工業者の利益を代弁し、地主・財閥擁護政策に対抗した。他方、歴史への関心も深く、日本史研究の基礎史料の収集編纂にも尽力した。田口の出版事業は「予約出版」の魁(さきがけ)をなした。晩年、厳密な考証史学の方法によって、多元的要素からなる社会との有機的連関で個人を総合的に叙述する「輪切体(わぎりたい)史論」を提唱した。
評価 同時代人には、多種多様な活動を展開した田口の生涯は全体として総合的に把握されることはなく、個々の専門領域に分化・特化して評価された。知的専門性の見地からは広く浅い故に杜撰粗漏との批判を受け、職業的専門性の見地からは多趣味多才のため大をなさず、器用貧乏と批判を受けた。専門性においては批判されたが、言論文章をもって自由主義経済の知識を明治期を通じて普及した点で「日本のアダム・スミス」と評され、東洋・日本の文化や歴史に対する造詣の深さから「明治の新井白石」ともいわれ、さらに学界に貢献した各種編纂物の出版事業を賞揚して「明治の塙保己一」とも称されるなど積極的な評価もある。日本の近代化過程に大きな足跡を残した人物である。

代表作

『**日本開化小史**』 1877年から82年にかけて出版した近代日本最初の本格的な文明史。日本古代から徳川幕府滅亡までを文明史観の立場から解明し、政治・経済・文学・宗教などの各分野を総合的に考究した。中国伝来の編年体方式の記述でなく、歴史を因果関係による進化発展として捉えた点で日本の歴史学史上画期的な意味をもつ。全集第2巻に収録。

『**自由交易日本経済論**』 1878年に出版された田口の一生を貫く思想の理論的基礎を築いた著作。自由主義経済学者の立場から、政府による産業への保護・干渉に一貫して反対している。全集第3巻に収録。

『**東京経済雑誌**』 1879年1月に月刊誌として創刊した経済雑誌。同年8月半月刊、1881年週刊となり、田口の死後1923年9月の2138号で終刊した。モデルは英国の経済雑誌『The Economist』誌で、日本にもこうした雑誌を発達させようと創刊した。当初は渋沢栄一の拓善会の援助を受けたが、独立自営の精神から翌年には後援を辞退した。一貫して自由放任主義を主張し、自由主義的な経済論・財政論を展開して政財界に影響を与えるとともに、各種の経済統計や市況を掲載し合理的根拠に立つ経済的思考の必要性を啓蒙した。1880年に保護主義的経済論に立つ犬養毅の『東海経済新報』とかわした論争は有名である。日本の経済雑誌の先駆。

キーワード **革命後の社会は百事草創に属す、一事に専なる能はず** 田口のモットー。事実その視野は経済、政治、財政、金融、史学、文学、哲学、社会学、人類学、考古学等の幅広い方面に及んだ。

最期 1905年(明治38)4月13日、慢性萎縮腎に中耳炎を併発し、本郷区駒込西片町(現・文京区)の自宅で死去。享年49歳。

Great Works 03

ていけん

鼎軒田口卯吉全集 全8巻 鼎軒田口卯吉全集刊行会 1927~1929年 <330.8/6>

解題 活動範囲が経済、歴史、政治の各方面にわたってかなり広く、そのいずれの分野でも第一人者であり先駆的役割を演じた田口を物語るような巻構成である。刊行会代表は長男文太で、顧問として渋沢栄一・阪谷芳郎・佐々木勇之助、編集顧問として久米邦武・伴直之助・塩島仁吉・西島政之と、田口と親交があり、諸事業を助けた人々が名をつらねた。黒板勝美・福田徳三・河上肇・櫛田民蔵・吉野作造・大内兵衛・長谷川如是閑が解説を書いている。各巻は多数の著書や論文から構成されているが、全集に収録されていないものも数多くある。1990年に吉川弘文館から復刊された。

内容

- 第1巻 = 史論及史傳 史海日本之部[雑誌「史海」の第1巻から第27巻に連載した日本史各時代の代表人物論を上下巻で刊行。上巻1892年 下巻1894年]【論文】史癖は佳癖[1891年 史学会での講演。同巻収録の「歴史は科学に非ず」(1895年)とともに、歴史とは何か、歴史の叙述はどうあるべきかを論じた鼎軒史学の概論。この論文で主張した輪切体の体裁で「史海」に人物史論を連載した。]他
- 第2巻 = 文明史及社會論 日本開化小史[和装6巻本 1877~1882年] 支那開化小史[経済雑誌社 1883~1888年] 商業史歌[東京経済雑誌に連載1899~1900年 経済雑誌社から単行本刊行 1901年 読みやすく暗誦しやすいように歌謡体で著した世界の商業史。]他
- 第3巻 = 経済(上)理論及理論闘争 自由交易日本経済論[1878年]【論文】経済学は何を論ずる学問なるか[1883年]自由交易論[1880年]他
- 第4巻 = 経済(下)事實及政策 【論文】直輸出[1883年 当時の保護干渉主義的な貿易政策下の直輸出を批判し、自由貿易を主張した]日本は自由貿易より甚しき政策を執る者也[1893年 経済の真説は「交易は相互の益なり」の一語にあると主張した]他
- 第5巻 = 政治 時勢論[経済雑誌社 1883年 内外古今の事例を参考に当時の国政を論じたもの] 條約改正論[経済雑誌社 1889年 当時の大隈外相が進めていた条約改正交渉の支持を訴えた個人演説をまとめたもの]他
- 第6巻 = 財政 帝国財政意見[大阪経済社 1894年 政府、政党双方の財政問題に対する取組への不満から、産業立国の基盤整備の必要を訴え結成した帝国財政革新会の大阪での演説の速記] 財政と経済[経済雑誌社 1903年 第8回総選挙出馬時の京橋新富座(中央区)での演説。地租増徴を訴えた。]他
- 第7巻 = 金融 【論文】幣制及び銀行論[経済雑誌社 1882年出版の「経済策」の第5章。中央銀行の設立や兌換紙幣、国立銀行条例の改正などを論じた。]貨幣制度意見[1895年 貨幣制度調査会の委員として同委員会に提出したもの。「貨幣制度調査会報告書」として刊行。複本位制の採用を提案している。]他
- 第8巻 = 隨筆及感想[専門業績以外の漫筆集] 楽天録[経済雑誌社 1898年 唯一の単行隨筆集]他

参考文献 ~この人をもっと知るために~

< 図書 >

- 田口卯吉(人物叢書 新装版)/田口親著
吉川弘文館 2000年 336p <289.1JJ/3995> 資料番号 21320817
- 田口卯吉と経済学協会/松野尾裕著
日本経済評論社 1996年 394p <331.21EE/14> 資料番号 20851911
- 田口卯吉と東京経済雑誌/杉原四郎・岡田和喜編
日本経済評論社 1995年 608p <330.5DD/204> 資料番号 20742698
- 田口鼎軒集(明治文学全集 第14巻)/大久保利謙編
筑摩書房 1977年 479p <918.6/176/14> 資料番号 12065694
- 鼎軒田口先生傳/塩島仁吉著
経済雑誌社 1912年 2,4,433p <289.1/91> 資料番号 10518942

< 図書(部分) >

- 田口卯吉 老荘思想と自由経済論/古賀勝次郎著(近代日本の社会科学者たち)
行人社 2001年 p131-166 <301.2KK/2> 資料番号 21389853
- 田口卯吉/御厨貴著(言論は日本を動かす 第1巻)
講談社 1986年 p33-66 <281T/122/1> 資料番号 12357158